

' 84.10 月

井深 大 連続対談

## 漢字は“右脳教育”

石井 勲(いしい いさお)

大正 8 年山梨県生まれ。大東文化大学卒。  
昭和 27 年、八王子市教育委員会指導主事を  
辞して、小学校 1 年生担任の教壇生活に  
入る。漢字の学習能力が、上級になるほ  
ど低下することを確認して、石井教育研  
究所を創立、漢字教育一本の道に入って  
30 年。「石井勲の漢字教室」ほか数多くの  
著書がある。

## あせらずに“待つ”こと

**井深** 私、大体、子供を“漢字族”と“テレビ族”の2つに分けて考えられると思うんです。漢字族というのは、小さいときに漢字に1度興味を持ちちゃうと、自分で本を読んで字を覚えて、自分でどんどん自分の道を開拓していく。テレビ族というのは、テレビからいろんな情報を上手に受けとめるけれども、自分自身を発表する力、何かを表現してリポートを出すといった、そういう力に非常に欠けているという感じ。

**石井** それは、おもしろい分け方だと思いますね。確かにそういうことを感じます。漢字教育をやっている幼稚園の親たちの声を聞きますと、卒園した後も、小学校へ行って、あるいは中学校へ行って、非常に読書が好きだといいますね。「うちの子は漫画は読まない」と。

**井深** それから、漢字族、だんだん高級なものを自分で求めていく傾向がみられる。

**石井** 論語をやってる幼稚園での話ですが、親が電車に乗りましてね、お隣の奥さんと盛んにべちゃくちゃお話をしていた。すると、子供が親の袖を引っ張りまして、「車にのぼりては正しく垂を取りて立つ。車中にては内顧せず、疾言せず」とこう言ったんです（笑い）。親は何を言ってるかちっともわからない。

**井深** 車に、何ですって？

**石井** 「車にのぼりては正しく垂を取りて立つ - まあいまで言えば、吊り革ですね。これを持って立つ。これ孔子の論語にあるんです。「車中にては内顧せず」、きよろきよろしないんですね。それから「疾言せず」早口でおしゃべりをしない。車にのったときの心得です。孔子が通勤のとき車に乗るんです。馬が引いたんですね。孔子は魯の襄公に仕えたわけですが、襄公からお呼びがありますと、車を命じてすぐにうちを出た。吊り革をちゃんとしっかり持って……。座ってないんですね。

子供が「これこれこういうことだ」と説明したんですね。母親が感心して、「子供に教わって、親も賢くなった」と言って、園長にお礼に来たということです（笑い）。

**井深** なるほどね。私の考えじゃ、もう論語なんていうのは早くやった方がいいですね。論語読みの論語知らずでも構わないんですよ。

**石井** そうなんです、そうなんです。それでいいんです。

**井深** 私、漢字があるために、日本人には思想的なものがかえって失われてしまうのではないかという考え方をずっと持ってきたんですが、このごろちょっとまた逆になりましてね。漢字ってのはどっちかという右脳なんですね……。

**石井** いや、両方らしいですよ。

**井深** しかし、世界じゅうの文字で右脳に属するのは漢字だけじゃないだろうか。もちろん、左の、右の、ってそんなにきれいに分かれるわけではないんだけど、少なくともパターン、図形としてぱっと受けとめられるのは漢字なんですね。右脳の教育のためには音楽やらなきゃいけない、美術に接しなきゃいけない、信仰とかそういうものにも接しなきゃいけません。漢字がここに新しく登場してくるべきじゃないかと。

このごろ私、痛感してるのは、ただ丸暗記しなきゃならぬものと、理解して覚えなきゃならないものってのをいまの教育はごっちゃにしているんですね。棒暗記、丸暗記しなきゃならないものは、厳然として存在しているわけなんですけどね。たとえば、九九なんてのは、3×3だから「三三が九」じゃなしに、「三三が九」というときには、もう何でもいいからそれで覚えなきゃいけない、そういう性格のものなんです。1番いい形は「三三が九」を覚えて、それからあと自分で初めて「ああ、三三が九っていうのはこういう意味だったか」と悟ることが1番必要だと思うんです。

**石井** 自分で悟る、この悟るということのを待つことが、私、教育では非常に大事だと思うんです。

**井深** 待つ。あせらないでね。

**石井** ところがいま、親でも教師でも、あせって教えるわけですよ、何でも。漢字ってものは、あせって教えるはいけない。たとえば、鶴を経験したときに鶴という字を教えるとすぐ覚えるんです。鶴を見もしないで、経験のないものを字ばかりあせって教えるわけですよ。

**井深** その点、私は先生とちょっと違うところがあるんですけどね、覚えるときは、鶴が何だろうが構わず、何でも機械的に覚えちゃうという……。

**石井** それはそうです。ただ待つということは、なるべく経験の場を待って教えること。それで鶴や鳩がわかって、子供は必ずその中から「鳥」という字を発見する。その発見するのを待つんです。「前に習った鶴と今度習った鳩の字には同じところがあるでしょう」と教えるのは待つと欲しいと……。

**井深** それは重要なことです。今度は「虫がつくものにはどういうものがあるだろう」とかって、それは自己開発なんですよ。

**石井** そう、そう。そこなんです。そこをさきに教えてしまうと……。

**井深** 「これは虫だから虫がつくだよ」という表現はいけない。

**石井** そのところを子供に発見させるまで待つということね、これ、私、いまの教育で1番のテーマだと思うんです。

## 「悪魔」という字を考えた

**井深** それともう1つ、生理的に、パターンを受けとめるのに非常にいいとき……そういうものを受けとめられなくなる年齢というのが必ずあると思うんです。

**石井** それ、小学校の2年から3年だと思います。

**井深** ああ、そうですか。

**石井** 小学校の2年生ぐらいまでは、幼児と同じパターンでさっといくんです。ところが、もう3年生あたりになりますと……。

**井深** 理屈で覚えなきゃならなくなるんですよ。そこが全然違ってくると思うんですよ。

**石井** 1番高いところは、2、3歳です。2、3歳が頂点。それから後はもう下る一方ですよ。小学校の3年生ぐらいになると、もうどうしようもなくなってくる。

**井深** ただその漢字というものを非常におもしろいと思わせる、どうやったらおもしろく思うかということと…。

**石井** それはいまいったように、共通しているところを発見させることですね。どこが同じでどこが違うかという、そういう見方をして、そして、それを発見したときに「ああ、いいところを見つけたね、これは虫という字なんだよ」と、そして「虫というのはね、蜂や蝶の仲間のことを言うんだよ」。もう目を輝かせて聞くんですね。

**井深** 海外に駐在する人の子供たちの1番大事な問題は、後になって追いつけない漢字だと思う。これも非常に強く言ってるんだけど、どうしてもみんなピンとこないんですね。数学だろうが、言葉だろうが、何でも追いつけるんだけど、漢字を使う能力については、もう小学校6年になったら、何といてもツレーイトなんです。むしろ生理的、物理的問題だよ。頭脳とか、何とかって問題じゃないんですね。だから海外へ行く人こそ、小学校へ入る前に、漢字に興味を持たしちゃうことですね。英語なんて向こうにいりゃあ勝手に入ってきますからね、漢字だけは接する機会がないだけに、縁遠いものになっちゃうんです。

**石井** そうです。もう本当にそうです。ことに常用漢字にないような鳩とか、鶴というものから小学校で習う鳥という字を子供に発見させて、そして、発見の喜びを味わわせる。私はね、この発見の喜びというものを親や教師がみんな奪ってしまって、それが自分でものごとを切り開いていくという、そういう意欲を喪失させているんじゃないかと見ております。

実は、私の幼稚園でこういうことがありました。ある先生が、悪魔という字を黒板に書きまして、そして、「だれかこれ読める子？」って聞いたら、だれも読める子がいない。

「あ、読めないなら、教えてあげましょうね」と言ったら、「先生、待ってください。自分たちで考えるんだから」。先生はびっくりしてしまったわけです。読めない字をいくら考えたって読めるようになるはずがない。ところが読んじやったんです。どうしてだと思います？悪魔の魔という字に鬼という字がある。それを子供はちゃんと発見して「あの字には下の方に鬼という字がある。だからあれは鬼の仲間だ」。そしたらある子が「あれは上の字を、確か新聞でこの間見て、わからないからお父さんに聞いて覚えてる。それは凶悪犯人という言葉だった」と。それで、凶悪のどっかだというわけですね。そしたら、悪だ。それじゃあ、あくまに違いない」と（笑い）。

**井深** ふーん、漢字族というのは、そういう傾向を持つんだね。サイエンティフィックとはそういう意味ですね。

**石井** そうなんです。科学的というのは、そういう科学的思考なんですよ。で、これは幼稚園のうちにやらないとだめです。

## “ ピンクい ”

**石井** ときに、私の孫が3歳のときに「おじいちゃん、この花、ピンクい色してるね」といってたんです。

**井深** ピンクい？

**石井** そう“ピンクい”って言うんですよ。私も“ピンクい”って言葉はそのとき初めて聞きましたから。

**井深** 形容詞ですか。

**石井** 形容詞ですからね。ですから、たいした言葉を発明して子供に教えるものだなあと、嫁に言いましたら、「いえ、私はこんな言葉を1度も使ったことはありません。うちの子はそういうことを言うけど、あれは自分で言い出したんです」って…。

**井深** 自分で言い出した？

**石井** それで私、考えてみたんです。たとえば、動詞の活用で未然形を使うべきところは、ちゃんと未然形を使うでしょう、もう3歳から4歳になると。連用形を使うべきところはちゃんと連用形を使う。これは、文法を教わっているわけじゃないんですよ。それで言葉として習っているから、頭にあるから使うんじゃないんですよ、ちゃんと法則を自分でこしらえ、こしらえた法則を使ってやっているわけです。だから、白、白い、赤、赤い、ピンク、ピンクい - と、こうくるわけです。動詞なんか全く、行かない、泣かない、書かない、というふうに、1つがわかるというと、ちゃんと応用がきく。ピンクといえば、外国語だから大人ならそこで全然動かないわけです。ところが子供は…。

**井深** そこはピンクっていうのは、日本語であるか英語であるか、そんな差別はないわけですね、子供には。

**石井** ええ。同じ、白、赤、ピンクと、こういうように言っているわけですからね。ですから、子供というのはそういう、法則化し、そしてそれを適用するという能力を持っている。だからそのときに、そういうものを入れてやらなきゃ、法則化しようにも材料がなかったら法則化できないでしょう。私は、それが人間の頭の栄養だと思うんです。つまり、胃をからっぽにしていりゃ、だれだって力が出てこない、頭をからっぽにしているから目に光りも出てこないわけですよ。

**井深** 本当に目の光りが違うね。

**石井** 精薄児でも漢字教育をしますと、目が輝いてくるんですよ。だから、あれは明らかに頭の栄養失調ですよ。精薄児には、かな文字を教えたって頭に入らないんです。

**井深** それは重大問題ですね。漢字だったら入るんですか。

**石井** 漢字だったら入るんです。かなは、毎日毎日、1年間かかって教えても覚えられないんです。ところが漢字は簡単に覚えている。そしておもしろいのは、言葉以上に漢字のほうが早く頭に入るんです。ひどい精薄児になりますと、言葉が覚えられない。これは花だよと言っても「はな」と口からは出てこない。ところが「花」という漢字は覚えていて、「はな」と「花」がちゃんと結びつく。それから、まだ言葉が言えないような赤ちゃんに毎日、目という字を見せて、目を示す。そうすると、目とか、耳とか、鼻とか、口がきけないうちに、目という漢字を見ると目を指さす、耳という漢字を見せると耳を指さす、鼻という漢字だと鼻を指さすんです。漢字を出すとわかっているということですね。発音はできない。

ですから、確かに言葉を覚えるよりは、漢字と物とを結びつける方が早いですね。8 ヶ月あたりから可能ですね。

**井深** それはおもしろいですね。

## 五丈原の詩をうたおう

**井深** 先生、幼稚園論語習得運動をやらかしましょうや。具体的な目に見えるものというのはいずれ目に見えるんですよ。ところが抽象的なモラルであるとか、信仰であるとか、そういう抽象的なものこそそういう時代に身につけなきゃならないんですけれども、字として自分が論語の中の文句を知っているということが、後になってそういうものを身につけるのに非常に力強い力になると思うんです。まず、形とかそういうもので身につけておいて、抽象論というのは後からでもいいんだけど、漢字には2つの意味があって、そういう抽象的なものを何かしらそこが含んでるんだけどね、含ませないと教えられないということ打破したいんですよ。形として身につけさせて、しかもそれが抽象的な意味を持っているんだということが後になってわかるし、それがその人にとって大切なものになる - ちょっと表現がまずいけど。

**石井** はあ。つまり入れとかないと芽生えてこないんですよ。論語を、いま、大体20歳前後で初めてやるわけですね、高等学校から大学あたりで論語をやる。理屈がわかってきてから。

**井深** 左脳で解釈せざるを得なくなっちゃうわけなんだよね。

**石井** ですから、本当の論語がわからないということですよ。そういうときに論語を学ばせてもかえってよくない。どうせ論語が本当にわかってくるのは30、40、恐らく40を過ぎてからです。

**井深** そういう時代までそういうものを読まないでおくというのは、何も親しみが出てこないしね、だから、幼稚園論語発生論というのは、非常に重要なことですよ。

**石井** 山本七平さんもそれを言っているんです。結局、そんな時期にやらないで、むしろ意味もなにもわからない時代に頭の中に入れておけば、それが今度身につくと・・・。

**井深** 本当の自分のものになる。そこら辺が今までの教育というのは、絶対に意味がわからなくて教えておこうということは、日本の教育には1つもないですね。

**石井** これは星落秋風五丈原、土井晩翠の有名な・・・。ここのところなんかいいでしょう。(2人で、声を合わせて朗読する。以下五丈原の詩文)

祁山悲秋の風更けて  
陣雲暗し五丈原、  
零露の文は繁くして  
草枯れ馬は肥ゆれども  
蜀軍の旗光なく  
鼓角の音も今静か。

丞相病あつかりき。

末は黄河の水濁る  
三代の源遠くして  
伊周の跡は今いづこ、  
道は衰へ文弊れ  
管仲去りて九百年  
楽毅滅びて四百年  
誰か王者の治を思ふ。

丞相病あつかりき。

これをすぐ覚えてしまうんです。この1冊、幼児は完全に覚えてしまいます。私ね、漢字というような言葉だけにしていましたけれども、子供がこういう文章というものに喜ぶことに気がついたんです。

**井深** だから、詩というものを大切にしなきゃいけないんだね。これは幼稚園ですか。

**石井** そうです。みんな幼稚園です。テープで。

**井深** これは、ひょっとしたら一茶の俳句の暗唱よりも意味が大きいかもね。意味のわからないことを教えるというのが本当なんですよ。全部言葉でわかって納得するってことは、もう前時代的なことで、言葉であらわせないものをわれわれはつかんでいかなきゃならない時代に入ってきてると思うんです。つまり右脳ですよ、これは。絵をつけたり、ひとつひとつの漢字だけを発言して教える、というのはやっぱり、大人の知識からでてきているんでね。だから、この「五丈原」をやるというのはおもしろいな。ことに、幼児がそれで喜ぶとは…。

**石井** 喜んでですよ。喜ぶのは漢字ばかりのところなんですよ。

**井深** かなまじりの方が、われわれにも読みやすくていいけど（笑い）。

## 子供は楽しんで覚える

**石井** 子供は不思議に漢字ばかりのものを喜んでですね。1番喜ぶのは秋風五丈原。それから「大学」もやってみたんです。松下政経塾の塾生に講義しているんですが、それと同じ教科書を使ってやったんです（笑い）。

**井深** 幼稚園と？（笑い）。

**石井** 政経塾は、やっぱり東大、慶応、早稲田というのが1番、多いわけですよ。ですが、「大学」なんか私が読んで、講義して、次に読ませると、結構引っかけますね、スラス

ラ読むのは少ないですよ。

**井深** それは字が読めるだけにね。

**石井** ええ。ところが、幼稚園の子供というのは、スラスラと読みますからね、つかえずに。

**井深** おもしろいなあ。

**石井** だから、覚えられるときにうんと入れとけば、頭は別に使いませんからね。子供は楽しんで覚えるわけですから。

**井深** どこがおもしろいんだろうね。

**石井** それを私、考えたんですが、それが本能だと思うんですね。幼児というのはみんなそういう具合に生まれついてきていると思うんです。ところがそういうものを何も与えないから…。頭が栄養として欲しがっているわけですよ。

**井深** だからね。脳細胞というのは数パーセントしか使われていないわけですよ。まだまだ入れなきゃならない問題がいっぱいあるのを…。

**石井** こんなものは、こんなものは大変だろうというんで、みんな控えちゃう。

**井深** とにかく、子供にそんな難しいことはということがね。

**石井** これが1番、いまの教育の困った点ですね。

**井深** だから暗記なんていうのは、いくら脳を使ったって、キャパシティは大丈夫なんだから、あらゆるものを棒暗記させときゃいいんだけどもね。

## もっと詩を大切にしよう

**石井** 本当にいまの教育のいけないのは、1番大事なそういう国語教育です。昔のような名文がないんです。だから、暗唱することができないんです。暗唱にたえないわけですよ、子供が。

**井深** 暗唱ということは早くやらなきゃいかんということですよ。

**石井** われわれのころは、いまだに頭の中に残っているものがあるでしょう。いい調子のね。それがいいですよ、いまは。そして、ことに文語調なんてのは非常に調子がいいでしょう、ところが文語なんてのはむずかしい。

**井深** かなまじりになったというのは非常に進歩ですね。それからね、私は書類でも何でも、かなまじり漢字で、行を遠慮会釈もなく変えるという文章の、左横書きってのが、世界で1番いい表現方法だと思うんです。これはぱっと見て大体がわかるというのもあるし、丁寧に読んでいけば、その意味ってものも正確なつかまえ方ができるしという、そういう意味で、たとえば、1番悪い例を出しますとね、ローマ字のテレックスです。あれは全部字を読まなきゃ意味が全然わからないですよ。あれの対照的なのが、かなまじりの漢字文というやつが最高のものだろうと。漢字だけでもだめなんです。

**石井** 中国がうまくいかないのはそれなんですね。漢字ばかりですと読みにくいですよ。漢字とかながうまい具体的にまじっているのが読みやすい。

**井深** それから読みようがいろいろできるわけなんです、そのためにね。



## 漢字かなまじり文は世界一

**石井** 有名なノアム・チョムスキーという言語学者がいるんですよ。これはマサチューセッツ工科大学の教授で、世界的に20年ほど前から有名な人なんですが、10年ほど前に日本へ来ましたときに、自分は日本語を詳しく知らないから自信を持っては言えないけれども、漢字かなまじり文というのが世界で1番表記法として有効なんじゃないかと・・・。

**井深** かなまじりの漢字として、書くのは絶対に縦なんですがね。読むのは、私は、左横書きだと思っね。それは慣れもありますよ。

**石井** 私は縦の方がいいと思う。なぜ縦の方がいいかという、左右で1つ見るわけでしょう。そのまま見た形で、こう下がっていくのが私はいいんじゃないかと思う。横にすると、この関係で、2つこういう関係が横に動いていくよりは、何かこうきた関係が、横から左右でとらえたものが、下へそのまま下っていくのがいいんじゃないかと・・・。

いま、台湾との教育の交流をしているのですが、向こうの研究発表に、「1目読み」っていうのがあるんです。本をぱっと見て、1ページ全部を読んでしまう。そういう教育法をやっているんです。これ初めはだんだんと増やしていくわけですよ。1行をぱっと見て、それを今度2行にし、3行に増やしていく。そうするとできるんだそうですよ。

**井深** だから、イランとか、サウジとかでコーランのお経を、詩人が、浪花節みたいにみんな集めて、音吐朗朗とやるということが、どれだけしみ込んで、その人たちに影響を及ぼしているか、そういう意味合いというものをもうちょっとわれわれは考えなきゃいかんかもしれない。日本の教育では詩というものを何もとらえていないでしょう、ほとんど。だからもっと詩を大切にしなければ本当の教育はできないんだと。

**石井** 子供のつくった、詩でないような詩もあるが。詩とは言えないんです。子供らしい発想はそこにある。だけど詩というのは、やっぱり、韻律を持っているということが大切ですよ

おわり